



TITLE:

ハエ蛆症を合併した自己陰茎切断 の1例

AUTHOR(S):

富田, 雅乃; 内島, 豊; 岡田, 耕市; 山口, 昇

CITATION:

富田, 雅乃 ...[et al]. ハエ蛆症を合併した自己陰茎切断の1例. 泌尿器科紀
要 1984, 30(9): 1293-1296

ISSUE DATE:

1984-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118265>

RIGHT:

ハエ蛆症を合併した自己陰茎切断の1例

埼玉医科大学泌尿器科学教室（主任：岡田耕市教授）

富田 雅乃・内島 豊・岡田 耕市

埼玉医科大学寄生虫学教室（主任：堀 栄太郎教授）

山 口 昇

A REPORT OF SELF-AMPUTATION OF THE PENIS WITH
SUBSEQUENT COMPLICATION OF MYIASIS

Masano TOMITA, Yutaka UCHIJIMA and Koichi OKADA

*From the Department of Urology, Saitama Medical School**(Director: Prof. K. Okada)*

Noboru YAMAGUCHI

*From the Department of Parasitology, Saitama Medical School**(Director: Prof. E. Hori)*

A 38-year-old male was admitted to our emergency ward on Oct. 27, 1982, because of severe pain at his penoscrotum. Upon physical finding on admission, his penis was found to have been completely amputated 2 cm distally near the root with a razor by himself to commit suicide a few days before admission. On the affected part were much coagulated bloodmass and slough and moreover there were 50 maggots about 5 mm long swarming and wriggling, but no bleeding yet and little sign of inflammation.

After exclusion of these maggots and cleaning the slashed surface, cutaneous urethrostomy was performed.

Postoperative course was favorable but we could not prevent the patient from leaping to his death 45 days after the operation.

Self-amputation of the penis with subsequent complication of myiasis is a very rare condition. Since the report of self-amputation of the penis by Matsushita in 1937, this case is the 16th in Japan. In most cases the patients had mental disorder. In this case the patient was schizoid.

On the other hand, 133 cases of myiasis were reported in Japan from 1903 to 1983. In the present case the species that caused myiasis was *Lucilia ampullacea*.

A very rare case of self-amputation of the penis with subsequent complication of myiasis is documented with a review of the literature on this subject.

Key word: Self-amputation of the penis, Myiasis

緒

言

症

例

自らの意志による外性器の損傷はまれである。最近われわれは、自殺を目的として自己陰茎切断を施行し、さらに受傷部位にハエ蛆症を合併した症例を経験したので報告する。

患 者：38歳。無職
初 診：1982年10月27日
主 訴：受傷部位の激痛
家族歴：両親ともに、患者が幼少の頃死亡

既往歴：不詳

現病歴：1982年10月23日頃、雑木林の中で首を縊り自殺を図ったが、枝が折れて失敗。さらに、両下肢を紐で縛り、その紐に石を縛りつけて池の中へ投身したが、息苦しさに耐えきれず、岸に泳ぎついて失敗。その後カミソリで、両手首の皮膚を数カ所傷つけてはみたが死にきれず、最後に陰茎を切断すれば死ぬことができると思い、カミソリを用いて、これを切断し、切断陰茎は自ら捨てた。

その後、人目につかぬようにかくれていたが、10月27日早朝、受傷部位に蛆が発生し、蛆が動くたびに局所に激痛が発し、さらに空腹と寒さに耐えかねて、自ら近くのドライブインより救急車を呼び、当科へ入院した。

現症：体格中等大。血圧 138/94 mmHg。顔面蒼白で苦悶状を呈し、眼瞼結膜に軽度の貧血を認めた。衣服には泥と雑草が付着しており、下着は凝血塊で汚染されていた。両手首皮膚には九条のためらい傷を認めた。陰茎は根部から約 2 cm のところで完全に切断されており、陰囊皮膚も一部切除されていた。受傷面は凝血塊におおわれていたが、すでに止血し、その表面に、体長約 5 mm の蛆を50数匹認めた。しかし、受傷部位には炎症所見をほとんど認めなかった。

入院時検査所見：

血液所見：赤血球数 $311 \times 10^4/\text{mm}^3$ 、白血球数 $7,000/\text{mm}^3$ 、Hb 9.8 g/dl、Ht 29.9%。

生化学的所見：総蛋白 6.6 g/dl、総コレステロール 149 mg/dl、BUN 30 mg/dl、クレアチニン 1.4 mg/dl、GOT 137 mu/ml、GPT 78 mu/ml、LDH 289 mu/ml、ALP 62 mu/ml、Na 136 mEq/l、K 5.0 mEq/l、Cl 95 mEq/l、と若干の貧血および腎機能、肝機能障害を示したが、検尿所見には異常を認めなかった。

手術所見：1982年10月27日、全麻下で手術施行。まず創部の蛆を丹念に取り除くとともに、凝血塊を除去し、デブリードメントを施した (Fig. 1)。創面の凹凸不整がいちじるしいため、陰茎根部をネラトンで緊縛したのち、約 5 mm 近位側で新たに陰茎を完全に切断し、創面を整えた。陰茎背動静脈、深部動脈を結紮し、白膜縫合後、尿道皮膚瘻を造設した (Fig. 2)。

術後経過：術後経過は良好で、患者自身かなり多弁となったが、自分の過去のことや自傷行為についての動機は、あきらかにしようとはしなかった。しかし、当科入院時、偽名を使用していたことや、被害妄想的な発言を多く認め精神分裂病の疑いが濃厚で、当大学精神科の指示で転科予定であったが、術後1カ月半、投身自殺をした。

考 察

自己陰茎切断は、欧米において1901年 Strock が最初に報告¹⁾して以来、10数例の報告例しか認められず²⁾、きわめてまれな疾患と考えられ、本邦においても1937年松山が報告³⁾して以来、われわれが調べたかぎりでは、1982年までに15例しか報告されておらず、自験例は本邦16例目に該当する (Table 1)。本邦自己陰茎切断16例について検討すると、年齢は10代から40代の青壮年層に多く認められ、動機については患者の話からは理解することが困難で、背景に精神分裂病の存在することが多い。自験例においても真の動機は不明であるが、「周囲の人々は、自分をおかしいやつだとあざ笑う。」「精神科に入院すれば、強制労働をさせられ、食事も取らせてもらえない。」などと放言し、精神病気質の存在を示唆させた。このため、当精神科でもこれについて転科のうえ、詳細な検索をおこなう予定であった。

陰茎切断に使用されている道具については、カミソリが最多である。いずれも鋭利な刃物が多く、切断部位も陰茎根部である。このことについて、萬谷ら⁴⁾は、ただ衝動的に切断したというよりは、もっと根底に切断してしまおうという積極的な意図のあることを指摘している。

治療法については、尿道皮膚瘻が多い。自験例も受傷後数日を経過しており、創部の汚染もいちじるしかったため、尿道皮膚瘻を施行した。近年、マイクロサージカルに血管吻合、神経吻合をおこなって切断陰茎の再吻合の試みもおこなわれている⁵⁾。また、自験例では、受傷部位の著明な汚染と受傷後数日の経過にもかかわらず、局所の炎症所見が乏しかったことの理由として、ハエ蛆自体の創傷浄化作用によるものが考えられる。その本態としては、ハエ蛆の分泌する蛋白分解酵素と澱粉分解酵素の共同作用によるものであることが、1951年藤浪によって報告されている。これによると、ハエ蛆の描出物においても同様の作用の存在することが実証されている⁶⁾。

創面をおおっていた蛆は、前方気門、後方気門および第1第2関節の硬質の咽頭骨から、コガネキンバエ (*Lucilia ampullacea*) の2齢幼虫で、産卵後1～2日と推定された (Fig. 3)。この種類は、ヨーロッパ、北インド、中国、朝鮮半島、日本全土に分布し、春から秋にかけて低い丘陵地の林に生息し、早朝暗いうちから動物の死体を求めて活動するものである⁶⁾。

ハエ蛆症は本邦において、1903年小沢が最初に報告し、1958年森川⁷⁾が92例を集計報告している。われわ



Fig. 1. ハエ蛆及び凝血塊を取り除いた受傷部

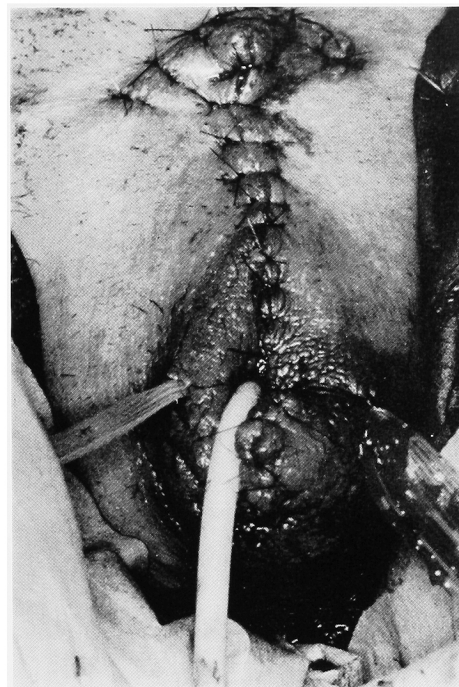


Fig. 2. 尿道皮膚瘻造設術後の状態



Fig.3. 受傷部に付着していたハエ蛆（コガネキンバエの2令幼虫）。体長約 5 mm

れが調べたかぎりでは、1983年までに、本症は133例報告されている（Table 2）。133例中67例が外耳道で、ついで消化器33例、尿路生殖器14例に本症の発生を認めている。尿路生殖器の14例中13例は、いずれも尿とともにハエ蛆が排泄されたものであり、自験例のように、陰茎切断部を中心にその創面に発症したものは、森川による蛆症分類によると、外部蛆症、外傷性蛆症に相当する⁷⁾。

蛆の種類として、133例中キンバエ（*Lucilia*

phaenicia spp.）によるものでは、わずか8例であり、自験例のように、コガネキンバエによるものは、本邦で最初と考えられる。

ところで本症での拡大解釈として、ハエ症というものがあるが、これは成虫の生体内への迷入をも含めたものが少なくない。しかし、医動物学的には、Zumpt (1965)⁸⁾ の定義「the infestation of live human and vertebrate animals with dipterous larvae, which, at least for a certain period, feed on the host's

Table 1. 本邦自己陰茎切断症例

No.	報告者	年度	年齢	動 機	道 具	治 療 法	術 後 経 過	精神科的診断
1	松 山	1937	不詳	陰茎するのに邪魔であり取ってしまつたら困休に陰茎がきてもあろうと思つた	不 詳	不 詳	不 詳	神経衰弱
2	宮 川	1949	37	不 詳	不 詳	尿道皮膚瘻	17日目に破傷風で死亡	不 詳
3	紺 屋	1965	17	自慰行為の目的のため陰茎に身が入らないため	カミソリ	尿道皮膚瘻	不 詳	不 詳
4	今 村	1971	47	不 詳	草刈り鎌	尿道皮膚瘻	良 好	精神分裂病
5	有 吉	1973	21	周囲の人が神に見え、陰茎を切ることに より自分も神になれると思つた	果物ナイフ	尿道皮膚瘻	良 好	精神分裂病
6	松 本	1976	39	不 詳	菜 鋏	尿道皮膚瘻	良 好	精神分裂病
7	西	1978	28	性欲に対する嫌悪感に耐えられない	カミソリ	端々吻合(血管吻合せず)	良 好	不 詳
8	田 中	1978	24	不 詳	料理包丁	端々吻合(血管吻合施行)	良 好	不 詳
9	萬 谷	1978	43	「陰茎を切断しろ」という幻聴にもとづ く作為行為	カミソリ	尿道皮膚瘻	良 好	精神分裂病
10	清 水	1978	25	不 詳	不 詳	尿道皮膚瘻	不 詳	精神分裂病
11	清 水	1978	35	不 詳	不 詳	陰茎再吻合	5日目に突然死亡	精神分裂病の疑
12	岡 田	1979	35	不 詳	不 詳	陰茎再吻合	4日目に突然死亡	不 詳
13	斉 藤	1979	26	不 詳	不 詳	尿道皮膚瘻	6日目に突然死亡	精神分裂病
14	黒 田	1979	25	精神分裂病にもとづく幻覚発作による	不 詳	陰茎形成術	不 詳	精神分裂病
15	奥 坊	1982	43	寛解期中にもとづく幻覚	不 詳	端々吻合(血管吻合施行)	良 好	覚醒剤中毒
16	自験例	1983	38	自殺目的	カミソリ	尿道皮膚瘻	1ヵ月半後に投身自殺	精神分裂病の疑

Table 2. 本邦におけるハエ蛆症

部 位	例 数
外 耳 道	67
消 化 器	33
尿路生殖器	14
そ の 他	19
計	133

1983年3月現在²⁾

dead or living tissue, liquid body-substaneus, or ingested food」に従うべきものと考えられるが、それによると日本では、真性の人体ハエ蛆症はなく、すべて偶発性ハエ蛆症で、自験例もそのひとつであるとえられる。

結 語

自殺を目的として陰茎を根部から切断し、受傷部のハエ蛆症を合併した、精神分裂病の疑いのある38歳の症例を報告した。

稿を終るにあたり、御協力頂いた東京医科大学歯科大学医動物学教室 加納六郎教授に深謝致します。

この論文の要旨は、第416回 日本泌尿器科学会東京地方会で発表した。

文 献

- 1) Blaker KH and Wong N: Four cases of autocastration. Arch Gen Psychiat 8: 165~176, 1963
- 2) 有吉朝美・檜橋勝利: 自己完全去勢の1例. 西日泌尿 35: 325~329, 1973
- 3) 松山七五郎: 入院患者の自殺未遂—此んな救急処置をした話—. 医界展望 115: 16, 1937
- 4) 萬谷嘉明: 自己陰茎切断の1例. 泌尿紀要 25: 709~713, 1979
- 5) 奥坊剛士・大田修平・田中啓幹・山野慶樹: 日本アンドロロジー学会, 第1回学術大会予稿集, 100~102, 1982
- 6) 山口 昇・藤本和義・富田雅乃・内島 豊・岡田耕市: ハエウジ症の1例, 第10回埼玉医科大学医学学会総会予稿集, 9, 1983
- 7) 森川達二: 蛆症に関する研究, 第1報日本における人体蛆症に関する文献の考察. お茶ノ水医誌 6: 1451~1465, 1958
- 8) Zumpt F: Myiasis in man and animals in the old world, A Textbook for Physicians, Veterinarians and Zoologists, 11~15, Butterworth and Co., London, 1965
- 9) 藤浪修一: 創部のハエ蛆療法, 現代医学, 1巻2号, 98, 昭和26年1月

(1984年3月2日受付)